

## 大学生のセルフ・モニタリング傾向と 友人選択および友人関係スタイルとの関係

### Relations between Self-Monitoring, choosing friends, and friendship styles for University students

八城 薫\*  
Kaoru YASHIRO

#### <キーワード>

セルフ・モニタリング, 友人選択, 友人関係

#### <要 約>

本研究では、対人関係スタイルにかかわるパーソナリティ要因の一つであるセルフ・モニタリング特性を取り上げ、大学生の友人選択理由、および友人関係スタイルとの関連について検討した。セルフ・モニタリングとは、対人場面において周囲の状況や他者の期待を敏感に察知し、その状況や期待に適した自己表出行動をしようとする傾性のことである<sup>1)</sup>。調査は、首都圏内の私立大学に通う男女239名（女性：132名，男性：107名）を対象とし、質問紙調査で行われた。その結果、友人選択理由の尺度は「相手の性格」「物理的近接」「外見的魅力」「内面的類似性」「遊び仲間としての適性」「サポート源」の6因子が、友人関係スタイルを測定する友人とのつきあい方の尺度は「関係回避」「気づかい」「群れ志向」「関係不安」「関係志向」の5因子が抽出された。セルフ・モニタリングが高い人は、低い人に比べ「相手の性格」「内面的類似性」「サポート源」という理由で友人を選択し、「関係志向」的で「気づかい」のあるつきあい方をしていることが示された。他方、セルフ・モニタリングが低い人は高い人に比べ、友人のつきあい方において「関係回避」的で「関係不安」が高かった。大学入学時から調査時点までの間の親しい友人の変化について、セルフ・モニタリング傾向との関連を検討したところ、有意な差はみられず、調査対象者の約半数が入学当初と調査時点では親しい友人が異なっていた。

---

\*大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻

## 1. はじめに

近年、大学にうまく適応できずに問題を抱える学生への対応が増加しているように思われる。谷島<sup>2)</sup>は、その要因の一つとして、推薦入試やAO入試により入学し、学習習慣や学習態度を未習得のまま入学した学生の学力面での適応困難があると述べている。もう一つには、新しい組織の中で人間関係を構築することの困難さや、新しい関係を自ら構築しようという動機づけの低さがあるように思われる。白石<sup>3)</sup>は、人間関係や社会生活に適応できない近年の大学生の傾向を「大学生の幼稚化現象」と呼んでいる。また岡田<sup>4)</sup>では、「現代の青年は、見かけ上、楽しくはしゃいでいる反面、その実際は他者との関わりが薄くなり、形ばかりのかかわりにしがみついているという指摘がさかんになされている」ことを述べ、そのことが根拠のない仮想的有能感とつながり、些細なことへの傷つきやすさにもつながっていると指摘している。

青年期は第二の成長期といわれるように、新たな自分を見つけ、大人として成長していく時期であり、その成長に欠かせないのが友人関係である<sup>4)</sup>。大学においても友人関係を築くことは、自己の成長のみならず、まずは大学生活の適応に大きくかわるものといえる。学習面で多少の困難があったとしても、大学での友人関係、教職員との関係が円滑であれば、それらの問題をクリアしていくことは十分に可能であると考えられる。

本研究では、現代の大学生の友人関係について、対人関係スタイルにかかわるパーソナリティ要因の一つであるセルフ・モニタリング特性を取り上げ、大学生の友人選択、および友人関係との関連について検討することを目的とする。

### (1) セルフ・モニタリングと友人関係

状況に応じて行動を変化させやすい状況志向的な人がある一方で、常に内的手がかりを重視して一貫した行動をとりやすい特性志向的な人がある。セルフ・モニタリングとは、“対人場面において他者の行動や状況を観察し、自己表出行動や自己呈示行動（意図的な印象操作）がその場において

適切かどうかを考慮して自己の行動を統制する傾性”のことである<sup>1), 5)</sup>。そして、周囲の期待や状況に応じて適切な方向に自己を変容させていこうとする傾向の強い人を、高セルフ・モニタリング者という意味で「高モニター」、周囲の期待や状況に影響されず、常に自分らしくあろうとする傾向の強い人を低セルフ・モニタリング者という意味で「低モニター」とよび、これまでに多岐にわたる社会行動と関連するパーソナリティ特性として検討がなされている<sup>5)-20)</sup>。

セルフ・モニタリングと友人関係との関連では、Snyder, Gangstad, and Simpson<sup>21)</sup>が、友人選択に関する検討を行っている。その結果、高モニターはその時の活動に合わせて友人を選択し、低モニターは活動にかかわらず自分がより好意をもつ友人を選択することが示された。以上の知見をはじめとするいくつかの研究からSnyder<sup>10)</sup>は、高モニターが活動を基盤とする分割された世界観を、低モニターが情緒的側面を基盤とし区切りのない共有された（同質化された）世界観をもつという違いを見出している。また Snyder, Simpson, & Smith<sup>22)</sup>は、友人間のセルフ・モニタリングの類似性について検討した結果、高モニターは高モニターの親友を、低モニターは低モニターの親友が多いことを示し、友人関係におけるセルフ・モニタリングの類似性を見出している。

以上のような知見を踏まえて、八城<sup>23)</sup>では対人コミュニケーションの手段として現代の若者には欠かすことのできない、携帯電話利用から友人関係を探った。その結果、高モニターは、低モニターよりも携帯電話番号の登録件数、携帯メールの送受信数、携帯メールアドレス登録数が有意に多かった。また高モニターの携帯電話利用目的は、低モニターに比べて相手の状況把握や自身の報告、さらにコミュニケーション手段として用いることが多く、その利用の効果についても高モニターの方が携帯電話によっていつでも連絡が取れるという安心感が強く、より親密な対人関係が可能になったととらえていた。そして携帯電話を介して促進された対人関係親密化は生活充実感に影響していた。

高モニターと低モニターの“分割化された世界観 (segmented social world)” 対 “同質化された世界観 (homogeneous social world)” という世界観の違い<sup>10)</sup> は、言い換えれば、高モニターが目的によって結ばれた広く浅い対人関係を形成しやすく、低モニターが感情によって結ばれた狭く深い対人関係を形成しやすいということである。高校生までは、生活の大部分の時間を学校で過ごし、同じ仲間と長い時間を共に過ごすことから、狭く深い友人関係を構築しやすい環境にあったといえる。ところが、新しく始まる大学生生活は、学校と生活が分離し、アルバイトやサークルなど、それぞれ個人が多種多様な世界をもち始める。つまり大学は、低モニターの好むような感情によって結ばれる親密な友人関係意をはぐくむのに適した環境ではなく、高モニターの得意とするような目的によって結ばれた広く浅い対人関係が主流となっている可能性が高い。特に少人数ゼミのない大学生や低学年の学生は、一層その傾向にあると考えられる。とすれば、高モニターに比べると、低モニターは新しい友人ができるまでには多少時間を要することとなる<sup>24)</sup>。セルフ・モニタリング傾向は、大学への適応の速さ、適応度の違いに影響する可能性がある。

## (2) 大学生の友人関係選択理由とつきあい方

友人を選ぶ理由には、“住所や席が近い” といった「相互的近接」、 “なんとなく好き、親切でやさしい” といった「同情愛着」、 “相手の学業や人格を尊敬する” という「尊敬共鳴」、 “助け合う、チームがうまくいく” といった「集団的協同」がある<sup>25)</sup>。田中<sup>25)</sup>・石黒<sup>26)</sup>によれば、どのような友人選択理由が多いかには発達の年代差があり、幼い時期に多い「相互的近接」や「同情愛着」といった理由から、児童期、青年期になるにつれて「尊敬共鳴」「集団的協同」という理由が増加していくとされている<sup>4)</sup>。しかしながら岡田<sup>4)</sup>は、もし現代の若者の友人関係が希薄で、人格の発達が損なわれているとすれば、現代の青年はより幼い理由で友人選択を行っている可能性があるとし、岡田<sup>27)</sup>の調査結果を再検討している。

岡田<sup>4)</sup>は、大学生を対象に友人選択理由を4つに整理している。第一に“家族が知り合い”、“席や番号が近い” など自分の身近な人であることを理由として挙げる「物理的近接」、第二に“一緒に遊ぶ”、“家を行き来する”などの遊び仲間としての理由を挙げる「遊び仲間としての適性」、第三に“短所やミスを教えてくれる”、“ものごとの意見や考え方が一致する” といった理由を挙げる「価値観の一致」、第四に“手伝ってくれる”、“やさしい” といった理由を挙げる「相手の性格」である。この分類は、数量化Ⅲ類を用いた分析によるものであるが、その解釈は2軸の象限に依存しており、選択理由の構造を明確に分けるまでには至っていないといえる。そこで、本研究では因子分析を用いて、より実証的に構造を確認したい。

また岡田<sup>4)</sup>は、友人選択理由について年代が上がるにつれて“外面的で目に見える理由づけから、次第に相手の内面的な特徴に注目した理由づけへと、焦点が移っていく”と説明しながら、友人選択理由の調査項目に、外見的な側面での印象や類似性といった項目がみられない。大学という大多数の同世代がいるような状況における友人選択を検討する上では、外見的な手がかりも重要な要素になると考えられる。そこで、本研究では岡田<sup>4)</sup>の友人選択理由に加え、独自に外見的な類似や魅力に関する理由を加えて検討していく。

岡田<sup>4)</sup>によれば、大学生の友人とのつきあい方には3つのタイプがあるとしている。第一のタイプは、深刻さを避け、楽しさを求め、友人といつも一緒にいようとする「群れ指向」群である。第二のタイプは当たり障りのない会話ですませ、より内面的な関わりを避けようとする「関係回避」群である。第三のタイプは、友だちと個別的で深い関わりを求めようとする「個別関係」群である。すなわち岡田<sup>4)</sup>は、現代の青年の友人関係全体が希薄化しているわけではなく、若者の姿の1タイプであることを強調している。しかしこの解釈も、数量化Ⅲ類の分析結果によるものであり、その布置図をみると、3つのタイプでは明確に判断しにくい人も多くいる。そこで、本研究では岡田<sup>4)</sup>の「友だちとのつきあい方」の項目を因子分析に

よってその構造を確認する。

以上の検討を踏まえた上で、本研究ではセルフ・モニタリングと友人選択の理由、およびつきあい方の関係を探る。

## 2. 方法

### (1) 調査日および調査対象者

2008年6月に2つの大学で集合型の質問紙調査を実施した。調査対象者は、首都圏内の私立大学に通う18歳から23歳（平均：19.2歳，SD：1.24）までの大学生239名（女性132名，男性107名）であった。調査対象者のおよそ8割が大学1，2年生であった。

### (2) 調査項目

#### 1) セルフ・モニタリング尺度

Lennox & Wolfe<sup>28)</sup> の改訂セルフ・モニタリング尺度13項目を用いた。日本語の本尺度は、BUSS<sup>29)</sup> の翻訳を参考にして、小口<sup>30)</sup> が一部改訳したものをを用いた。回答は、各項目について「あてはまる（5点）」から「あてはまらない（1点）」の5段階で求めた。

#### 2) 友人選択理由

岡田<sup>27)</sup> の「友だちを選ぶ理由」を問う21項目に、独自に外見的側面に関する内容の項目を加え

た26項目を用いた（表2参照）。親しい友人を一名想起させ、その相手を友人とした理由として各項目に「あてはまる（5点）」から「あてはまらない（1点）」の5段階評定で回答を求めた。

#### 3) 友人とのつきあい方

岡田<sup>27)</sup> の「友だちとのつきあい方」を問う27項目を使用した（表3参照）。回答は、各項目について「あてはまる（5点）」から「あてはまらない（1点）」の5段階評定で求めた。

#### 4) 友人の変化に関する項目

大学入学初期の親しい友人と、現在の親しい友人が同一か否かについて問う項目。それぞれの時点での親しい友人を想起してもらい、イニシャルの記入を求めた。

#### 5) 基本的属性

年齢、性別、所属学部について回答を求めた。

## 3. 結果

### (1) 尺度の構成と信頼性の検討

#### 1) セルフ・モニタリング（表1）

セルフ・モニタリング尺度13項目について確認的因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った結果、2因子が抽出された。第1因子には“人が集まっているところでは、周囲の期待に応じて行動を変えることができる”や“相手や場面

表1 セルフ・モニタリングの因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

	F1	F2	共通性
<b>第1因子：自己呈示変容能力（<math>\alpha=.821</math>）</b>			
人が集まっているところでは、周囲の期待に応じて行動を変えることができる。	.713	.231	.406
相手や場面に応じて行動を変えるのが苦手である。（逆転項目）	-.697	-.129	.281
これまでの経験からして、どんな場面におかれても、必要に応じて行動を変えることができる。	.617	.159	.451
人に与える印象を思い通りにコントロールできる。	.612	.343	.395
何が期待されているかがわかれば、それに合った行動をとるのはたやすい。	.606	.061	.175
自分のやり方が人に良い印象を与えていないと気づいたら、すぐに変えることができる。	.564	.101	.328
愛想よくする方が得だと思っても、なかなかそれができない。（逆転項目）	-.519	-.107	.503
<b>第2因子：他者表出行動への敏感さ（<math>\alpha=.758</math>）</b>			
人にうそを言われても、たいていその人の言い方やしぐさから見破ることができる。	.143	.656	.522
自分が何か適当でないことを言ったときは、相手の目でわかる。	.063	.625	.371
人の目を見れば、その人の感情を読むことができる。	.382	.566	.466
人の感情や真意をつかむことにかけては、直観力がすぐれている。	.472	.547	.562
人と話をしているとき、相手のごくわずかな変化にも敏感である。	.172	.507	.492
みんながくだらない冗談だと思っているときには、おもしろそうに笑っていてもそれがわかる。	.026	.418	.287
固有値	3.13	2.11	
累積寄与率(%)	24.1	40.3	

に応じて行動を変えるのが苦手である（逆転項目）」に代表される「自己呈示変容能力」因子7項目が高い負荷を示した。第2因子には“人にうそを言われても、たいていその人の言い方やしくさから見破ることができる”や“自分が何か適当でないことを言ったときは、相手の目でわかる”に代表される「他者表出行動への敏感さ」因子6項目が高い負荷を示した。尺度の信頼性は、「自己呈示変容能力」が $\alpha=.821$ 「他者表出行動への敏感さ」が $\alpha=.758$ であった。

## 2) 友人選択理由（表2）

友人選択理由26項目について探索的因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った結果、6因子が抽出された。第1因子は“相手の性格がやさしいから”、“相手が自分を気にかけてくれるから”、“相手の性格が親切だから”といった相手

のやさしい性格部分を理由とする内容が高く負荷したため、「相手の性格」因子と解釈された。第2因子は“出身地が一緒だから”、“出身学校が一緒だから”という項目が高く負荷したため、「物理的的近接」因子とした。第3因子は“相手のファッションをお手本にしたいから”、“相手の外見がよいと一緒にいる自分に自信がつくから”など外見の良さを理由とする項目が高い負荷量を示したため、「外見的の魅力」因子とした。第4因子は“ものごとへの意見や考え方が一致するから”、“性格が似ているから”など価値観や性格の類似性を理由とする項目が高い負荷を示したため、「内面的類似性」因子と解釈された。第5因子は“一緒に遊ぶことが多いから”、“遊びに行きたい場所が一緒だから”の2項目がまとまったため、「遊び仲間としての適性」因子とした。第6因子

表2 友人選択理由の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
<b>第1因子：相手の性格（<math>\alpha=.785</math>）</b>							
相手の性格がやさしいから。	.878	.015	.053	.212	-.073	.258	.624
相手が自分を気にかけてくれるから。	.636	-.002	.135	.224	.137	.143	.505
相手の性格が親切だから。	.539	.002	.077	.140	.112	.005	.317
信頼できる相手だから。	.458	.100	-.058	.365	.337	.386	.581
<b>第2因子：物理的的近接（<math>\alpha=.772</math>）</b>							
出身地が一緒だから。	.033	.948	.011	.090	-.149	-.018	.569
出身学校が一緒だから。	.048	.728	.034	-.016	.200	.102	.557
家が近いから。	-.051	.539	.187	-.026	.176	.075	.348
<b>第3因子：外見的の魅力（<math>\alpha=.694</math>）</b>							
相手のファッションをお手本にしたいから。	.018	-.049	.718	.063	.065	.172	.399
相手の外見が良いと一緒にいる自分に自信がつくから。	.069	.098	.577	-.027	.008	-.007	.302
相手の外見が好きだから。	.162	.187	.539	.148	.066	.116	.379
相手の持っている服と自分の持っている服が似ているから。	-.008	.008	.525	.162	.075	-.016	.290
<b>第4因子：内面的類似性（<math>\alpha=.733</math>）</b>							
ものごとへの意見や考え方が一致するから。	.377	-.006	.129	.692	.102	.047	.533
性格が似ているから。	.197	-.029	.255	.613	-.061	.066	.446
気が合うから。	.368	.013	.017	.510	.271	.264	.496
趣味や興味が一致するから。	.105	.083	.087	.451	.324	.142	.348
<b>第5因子：遊び仲間としての適性（<math>\alpha=.642</math>）</b>							
一緒に遊ぶことが多いから。	.103	.144	.093	.087	.741	.133	.451
遊びに行きたい場所が一緒だから。	.208	.123	.424	.241	.485	-.006	.470
<b>第6因子：サポート源（<math>\alpha=.625</math>）</b>							
自分にはない考えを持っている。	.212	.107	.029	.064	.015	.640	.359
自分の短所やミスを教えてくれるから。	.064	.027	.158	.127	.132	.626	.351
固有値	2.14	1.83	1.78	1.72	1.25	1.21	
累積寄与率(%)	11.3	20.9	30.3	39.4	45.9	52.3	

は“自分にはない考えを持っている”，“自分の短所やミスを教えてくれるから”という自分の不足した部分を補うような存在としての理由であることから，「サポート源」因子と解釈された。尺度の信頼性は「相手の性格」が $\alpha=.785$ ，「物理的近接」が $\alpha=.772$ ，「外見的魅力」が $\alpha=.694$ ，「内面的類似」が $\alpha=.733$ ，「遊び仲間としての適性」が $\alpha=.642$ ，「サポート源」が $\alpha=.625$ であった。

### 3) 友人とのつきあい方 (表3)

友人とのつきあい方について，探索的因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果，5因子が抽出された。第1因子には“あたりさあわりのない会話ですませるようにしている”，“心を打ち明ける(逆転項目)”，“お互いの領分にふみこまない”といった項目の負荷量が高く，親密な関係を避けるようなつきあい方に関する項目のまとまりと解釈できるため，第1因子を「関係回

避」因子と命名した。第2因子は“相手の考えていることに気をつかう”，“冗談を言って相手を笑わせる”など，良好な関係を配慮するような項目が高い負荷量を示したため，「気づかい」因子と命名した。第3因子は“一人の友だちと特別親しくするよりはグループで仲良くする”，“多くの人とつきあうより一人のともだちとのつきあいを大事にする(逆転項目)”が高い負荷量を示したため，「群れ志向」因子とした。第4因子は，“友だちから取り残されないように気をつける”，“友だちグループのメンバーからどう見られているのか気になる”といった項目が高く負荷し，グループからの評価懸念や，グループから外れることへの不安に関する項目のまとまりと解釈できることから，「関係不安」因子と命名された。第5因子は“お互いの約束は決してやぶらない”，“友だちと一緒にいるときでも別々のことをしていることが

表3 友人とのつき合い方の因子分析結果(主因子法・バリマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
<b>第1因子：関係回避(<math>\alpha=.734</math>)</b>						
Q210 あたりさわりのない会話ですませるようにしている。	.652	.006	-.047	.128	-.125	.446
Q217 心を打ち明ける。	-.622	.086	-.132	-.014	.341	.457
Q204 お互いの領分にふみこまない。	.598	-.052	-.077	-.055	.015	.350
Q208 お互いのプライバシーには入らない。	.517	.154	-.095	-.174	.008	.341
Q211 相手の言うことに口をはさまない。	.486	.007	-.005	-.003	.243	.294
Q207 真剣な議論をすることがある。	-.451	.223	-.241	-.112	.051	.307
Q212 まじめな話題にならないよう気をつけている。	.387	.030	.287	.271	.037	.356
<b>第2因子：気づかい(<math>\alpha=.707</math>)</b>						
Q224 相手の考えていることに気をつかう。	.082	.676	-.083	.118	.063	.409
Q225 冗談を言って相手を笑わせる。	-.302	.610	.057	.024	.068	.605
Q221 ウケるようなことをよくする。	-.248	.562	.333	.073	.078	.626
Q218 楽しい雰囲気になるよう気をつかう。	.032	.553	.126	.089	.121	.352
Q222 互いに傷つけないよう気をつかう。	.186	.467	.084	.105	.100	.382
Q203 友だちグループ以外の他人とは、あまりつきあいたくない。	.165	-.332	-.217	.298	.214	.237
<b>第3因子：群れ志向(<math>\alpha=.565</math>)</b>						
Q205 多くの人とつきあうより一人の友だちとのつきあいを大事にする。	-.026	-.034	-.649	.103	.129	.312
Q226 一人の友だちと特別親しくするよりはグループで仲良くする。	.019	.095	.512	.058	.018	.267
Q219 みんなで一緒にいることが多い。	-.168	.147	.438	.172	.239	.309
Q227 意見や好みがぶつからないよう気をつけている。	.275	.082	.322	.206	.109	.250
<b>第4因子：関係不安(<math>\alpha=.574</math>)</b>						
Q220 友だちから取り残されないよう気をつける。	.118	.324	.198	.559	.060	.446
Q209 友だちグループのメンバーからどう見られているか気になる。	.175	.007	.007	-.514	.160	.319
Q202 相手に甘えすぎない。	.102	.241	-.002	.512	-.094	.337
<b>第5因子：関係志向(<math>\alpha=.491</math>)</b>						
Q206 お互いの約束は決してやぶらない。	.118	.149	-.203	-.237	.531	.294
Q214 友だちと一緒にいるときでも別々のことをしていることが多い。	.133	-.142	.030	.105	-.468	.231
Q216 友だちグループのためににならないことは決してしない。	-.024	-.018	.213	.144	.427	.227
Q201 突然まじめな話をして友だちをしらけさせない。	.045	.115	.318	-.104	.361	.286
固有値	2.46	2.29	1.57	1.54	1.24	
累積寄与率(%)	9.84	19.0	25.3	31.5	36.4	

多い（逆転項目）”など友人との関係性を大事に考えるような項目が高い負荷量を示したため、「関係志向」因子と命名された。尺度の信頼性は「関係回避」が $\alpha=.734$ 、「気づかい」が $\alpha=.707$ 、「群れ志向」が $\alpha=.565$ 、「関係不安」が $\alpha=.574$ 、「関係志向」が $\alpha=.491$ であった。

#### 4) 各尺度の基礎統計量および性差（表4）

セルフ・モニタリング、友人選択理由、友人とのつきあい方の基礎統計量を表4に示す。性別での違いを検討するため、対応のないt検定を実施した結果、セルフ・モニタリングでは性別で有意な差はみられなかった。友人選択理由では、「相手の性格」「物理的近接」「内面的類似」において

1%水準で有意な差が認められた。男性に比べて女性は「相手の性格」「内面的類似」の得点があり高く、女性に比べて男性は「物理的近接」の得点があり高かった。友人とのつきあい方では、「関係不安」「関係志向」において1%水準で有意な差が認められ、女性の方が「関係不安」が有意に高く、男性の方が「関係志向」が有意に高かった。また「気づかい」では5%水準で有意差が認められ、男性に比べて女性の方が「気づかい」得点があり高かった。

#### (2) 友人選択理由と友人とのつきあい方（表5）

友人選択理由と友人とのつきあい方の相関係数

表4 各尺度の記述統計量

	N	全体平均値	男性 (n=107)	女性 (n=130~132)	t 値
セルフモニタリング	237	3.32 (0.65)	3.35 (0.72)	3.29 (0.59)	0.66
他者表出行動の敏感さ	238	3.44 (0.73)	3.41 (0.79)	3.47 (0.59)	0.64
自己呈示変容能力	238	3.21 (0.78)	3.30 (0.79)	3.14 (0.77)	1.51
友人選択理由					
相手の性格	239	3.91 (0.81)	3.71 (0.81)	<b>4.07 (0.78)</b>	3.41 **
物理的近接	237	2.07 (1.30)	<b>2.41 (1.41)</b>	1.79 (1.14)	3.62 **
外見の魅力	236	2.75 (0.73)	2.73 (0.77)	2.77 (0.70)	0.37
内面的類似	239	3.79 (0.83)	3.62 (0.87)	<b>3.93 (0.78)</b>	2.94 **
遊び仲間としての適性	239	3.40 (1.12)	3.50 (1.13)	3.31 (1.12)	1.36
サポート源	239	3.51 (1.03)	3.42 (1.06)	3.58 (1.00)	1.23
友人とのつきあい方					
関係回避	237	2.75 (0.67)	2.78 (0.70)	2.72 (0.66)	0.64
気づかい	238	3.56 (0.69)	3.43 (0.70)	<b>3.66 (0.66)</b>	2.57 *
群れ志向	239	2.84 (0.73)	2.81 (0.78)	2.86 (0.70)	0.51
関係不安	239	3.14 (0.84)	2.98 (0.79)	<b>3.27 (0.87)</b>	2.67 **
関係志向	238	3.24 (0.66)	<b>3.39 (0.61)</b>	3.11 (0.66)	3.27 **

注) \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

表5 友人選択理由と友人とのつきあい方の尺度間相関 (n=239)

		友人とのつきあい方				
		関係回避	気づかい	群れ志向	関係不安	関係志向
友人 選択 理由	相手の性格	<b>-.239 **</b>	<b>.212 **</b>	-.055	.064	.082
	物理的近接	-.015	-.060	-.092	<b>-.129 *</b>	<b>.114 †</b>
	外見の魅力	-.077	<b>.134 *</b>	.106	<b>.188 **</b>	.073
	内面的類似	<b>-.325 **</b>	<b>.325 **</b>	.083	.092	<b>.135 *</b>
	遊び仲間としての適性	<b>-.241 **</b>	<b>.200 **</b>	.071	.029	<b>.265 **</b>
	サポート源	<b>-.307 **</b>	<b>.176 **</b>	-.032	-.055	-.011

注) †  $p<.10$ , \*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

を算出した。その結果、「相手の性格」は「関係回避」と1%水準で有意な負の相関、「気づかい」と1%水準で有意な正の相関がみられた。「物理的近接」は、「関係不安」と5%水準で有意な負の相関、「関係志向」と正の相関傾向がみられた。「外見的魅力」は、「関係不安」と1%水準で有意な正の相関、「気づかい」と5%水準で有意な正の相関がみられた。「内面的類似」は、「関係回避」と1%水準で有意な負の相関、「気づかい」と1%水準で有意な正の相関、「関係志向」と5%水準で有意な正の相関がみられた。「遊び仲間としての適性」は、「関係回避」と1%水準で有意な負の相関、「気づかい」「関係志向」と1%水準で有意な正の相関がみられた。「サポート源」は、「関係回避」と1%水準で有意な負の相関、「気づかい」と1%水準で有意な正の相関がみられた。

### (3) セルフ・モニタリングと友人関係（入学時と現在での親しい友人の変化；表6）

セルフ・モニタリング傾向の違いが、親しい友人の変化に関係しているか検討した。セルフ・モニタリング得点の高かった上位30%の人をセルフ・モニタリング高群、下位30%の人をセルフ・モニタリング低群とし、大学入学当初に親しかっ

た友人と調査時点での親しい友人が同一か否かのクロス検定を行った。その結果、セルフ・モニタリングの高低での違いはみられなかった。

表6 セルフ・モニタリングと親しい友人の変化

		入学当初 と異なる	入学当初 と同じ	計
セルフ・ モニタリング	高群	27 (56.3%)	21 (43.8%)	48 (100.0%)
	低群	27 (58.7%)	19 (41.3%)	46 (100.0%)

$\chi^2(1)=0.57, n.s.$

### (4) セルフ・モニタリングと友人選択理由、および友人とのつきあい方（表7）

(3)と同様に、セルフ・モニタリング得点の高かった上位30%の人をセルフ・モニタリング高群、下位30%の人をセルフ・モニタリング低群とし、友人選択理由、および友人とのつきあい方の尺度得点の平均値を算出し、対応のないt検定を行った。その結果、友人選択理由では、「内面的類似性」において1%水準の有意差がみられ、セルフ・モニタリング高群が低群に比べて当該得点が有意に高かった ( $t(93)=2.46, p<.01$ )。「相手の性格」「サポート源」において5%水準で有意な差がみられ、いずれもセルフ・モニタリング高群

表7 セルフ・モニタリング（高・低）での友人選択理由および友人とのつきあい方の平均値（標準偏差）

セルフ・モニタリング	低群 (n=49)		高群 (n=46)	t 値
友人選択理由				
相手の性格	3.63 (0.97)	<	4.01 (0.81)	2.05 *
物理的近接	2.13 (1.46)		2.01 (1.29)	0.41
外見的魅力	2.71 (0.72)		2.74 (0.77)	0.20
内面的類似	3.40 (0.87)	<	3.87 (0.98)	2.46 **
遊び仲間としての適性	3.11 (1.20)		3.54 (1.13)	1.79
サポート源	3.15 (1.10)	<	3.62 (0.99)	2.17 *
友人とのつきあい方				
関係回避	2.99 (0.66)	>	2.66 (0.81)	2.20 **
気づかい	3.08 (0.72)	<	4.07 (0.62)	7.14 **
群れ志向	2.69 (0.74)		2.85 (0.76)	1.04
関係不安	3.33 (0.70)	>	2.72 (0.94)	3.52 **
関係志向	2.99 (0.62)	<	3.46 (0.71)	3.41 **

注) \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$



が低群に比べ得点が高かった（「相手の性格」： $t(93)=2.05, p<.05$ ；「サポート源」： $t(93)=2.17, p<.05$ ）。

友人とのつきあい方については、「気づかい」「関係不安」「関係志向」においていずれも1%水準で有意な差がみられ、「気づかい」「関係志向」はセルフ・モニタリング高群が低群に比べ当該得点が有意に高かった（「気づかい」： $t(93)=7.14, p<.01$ ；「関係志向」： $t(93)=3.41, p<.01$ ）。これに対し、「関係不安」はセルフ・モニタリング低群が高群に比べ1%水準で有意に高かった（ $t(83)=2.05, p<.05$ ）。

#### 4. 考察

本研究では、大学生の友人選択理由と友人とのつきあい方の構造について再検討を行った。そこでまずそれらの構造について考察を行う。その後、友人選択理由と友人とのつきあい方についての男女での比較、および友人選択理由と友人とのつきあい方との関係から、現代青年の友人関係についても考察する。その上で、現代青年のセルフ・モニタリングと友人関係との関係について考察していくこととする。

##### （1）現代青年の友人選択理由と友人とのつきあい方

友人選択理由は、「相手の性格」「物理的近接」「外見的魅力」「内面的類似」「遊び仲間としての適性」「サポート源」の6つに分類された。すなわち、岡田<sup>4)</sup>の分類に加え、新たに「外見的魅力」「内面的類似」「サポート源」という3つの友人選択理由が見出された。

「外見的魅力」は、本研究において独自に作成・追加されたカテゴリである。大学という大きな集団に入り、その中から友人を選択していく際には、外見的な類似や魅力は重要な手がかりとなると考えられる。また、近年指摘される若者の友人関係の希薄化の実態を捉えるうえでも、表面的な手がかりに関する選択理由を用意しておくことは必要であると考えられた。「内面的類似」と「サポー

ト源」は、岡田<sup>4)</sup>において『価値観の一致』という同一カテゴリに解釈されたものであるが、本研究では岡田<sup>4)</sup> 性格や内面の一致・類似に関する項目が「内面的類似性」という一つの理由にまとまり、『価値観の一致』の中の自分の不足した部分を持ち、補ってくれるような相手という理由が「サポート源」という形で一つの分類を形成したものであり、『価値観の一致』の下位概念を見出した結果といえよう。

“友人とのつきあい方”は、「関係回避」「気づかい」「群れ志向」「関係不安」「関係志向」の5つに分類された。「関係回避」「群れ志向」は岡田<sup>4)</sup>の分類と一致するが、新たに「気づかい」「関係不安」「関係志向」という3つのつきあい方の特徴が見出された。「気づかい」因子に含まれた各項目は、岡田<sup>4)</sup>の「集団的關係一個別的關係」と「関係拒否－関係指向」という次元でみると、あらゆる象限に散在する。この結果からは、関係性や関係指向に関わらず、周囲の雰囲気や他者の気持ちに気づかう若者の姿が見出されよう。

他方、「群れ志向」「関係不安」「関係志向」の3因子は、本研究では尺度として使用しているが、いずれの尺度も尺度の信頼性を示す $\alpha$ 係数が.60とやや低い。因子の妥当性はある程度確認されたが、尺度として使用していくには、今後さらに項目内容等を改良し、再検討の必要があろう。

以上の因子分析結果をもとに、“友人選択理由”および“友人とのつきあい方”，さらにセルフ・モニタリングについて各因子得点を算出し、男女での比較を行った。その結果、友人選択理由では、女性が男性に比べて「相手の性格」「内面的類似」を重視していることが明らかとなった。一方、男性は女性に比べて「物理的近接」得点が高いことが明らかとなった。しかし、男性でも「物理的近接」の得点は他の選択理由と比べて低く、平均値も「どちらともいえない（3点）」よりも低かった。同様に、友人選択理由としては未成熟な理由といえる「外見的魅力」では男女差がみられず、いずれの平均値も「どちらともいえない（3点）」よりも低かった。このことから、大学生は男女ともに「物理的近接」や「外見的魅力」

によって友人が選択されることはあまり無く、白石<sup>3)</sup>の述べるような「大学生の幼稚化現象」は大学生のごく一部である可能性を指摘する結果といえる。

友人とのつきあい方では、女性が男性に比べて「気づかい」「関係不安」の得点が高かった。「関係不安」については当該尺度の信頼性が低いため再検討が必要であるが、女性の方が、より相手の気持ちやその場の雰囲気配慮しながら友人と付き合い、友人の中での孤立への不安も高いことが示唆された。一方、男性は女性に比べ「関係志向」が高かった。「関係志向」も尺度としては信頼性が低く、今後再検討が必要であるが、男性の方がより‘お互いの約束は決してやぶらない’や‘友だちグループのためにならないことは決してしない’など互いの結束を大事にするつきあい方の傾向がみられた。

次に、友人選択理由とその後のつきあい方との関連を検討した。その結果、「相手の性格」「内面的類似」「遊び仲間としての適性」「サポート源」の選択理由が高い人ほど、つきあい方として「気づかい」が高く、「関係回避」が低いという関連がみられた。すなわち、相手の内面性を重視した友人選択理由を挙げる人ほど、関係回避的な関係ではないが、相手に対する気づかいを忘れないという関係であることが分かる。これが現代青年の友人関係の特徴と言えそうである。その中でも「内面的類似」「遊び仲間としての適性」の高さは、相手との関係をより大事にしようという関係志向的なつきあい方とも関係していた。本研究では「関係志向」を測定する尺度の信頼性が十分ではなかったが、友人とのつきあい方のカテゴリとして、相手との関係を大事にしようとする志向を測定する尺度を用意する必要があるかもしれない。

次に、「物理的近接」という友人選択理由が高いほど、友人とのつきあい方において「関係不安」は低くなることが示された。‘出身地が一緒’や‘出身高校が一緒’といった「物理的近接」による友人選択は、発達初期の段階で行われやすい未成熟な友人選択といえる。そのような外面的手がかりでの関係であるがゆえに、関係性に

ついてもあまり深く考えることがなく、関係不安が低いのもかもしれない。あるいは、同郷という信頼感が関係への不安を低減している可能性も考えられよう。しかしながら「関係志向」の尺度の信頼性が低いため、この点も今後再検討が必要である。

さらに、「外見的魅力」を選択理由とする人ほど、友人とのつきあい方において「気づかい」や「関係不安」が高くなることが示された。「外見的魅力」は‘相手のファッションをお手本にしたい’や‘相手の外見が良いと一緒にいる自分に自信がつくから’といった項目で構成されており、外見的な手がかりと同時に利己的な理由の側面が強い。したがって、このような手がかりで友人関係が成立している場合には、友人としての結びつきも脆弱であると予想できる。そのため、‘友だちから取り残されないよう気をつける’といったように関係への不安が高いと考えられる。

## (2) 現代青年のセルフ・モニタリングと友人選択理由およびつきあい方

まず、セルフ・モニタリングについて男女差を比較したところ(表4)、有意な差はみられなかった。セルフ・モニタリングの下位概念である「他者表出行動の敏感さ」と「自己呈示変容能力」の平均値をみると、「他者表出行動の敏感さ」の平均値の方が男女ともやや高く、現代青年の他者表出行動に対する敏感さをうかがい知ることが出来る。

次にセルフ・モニタリング高群(以下、高モニターと略す)とセルフ・モニタリング低群(以下、低モニターと略す)の群ごとに、入学当初と調査時点で親しい友人が同じか異なるか、という友人の変化について、その変化の有無の割合を検討した。その結果、親しい友人の変化についてはセルフ・モニタリングの高低での違いはみられず、どちらの群も、半数の人は入学当初とは異なる友人が親しい友人になっていることが明らかとなった。しかしながら本研究では、なぜ入学当初と現在では異なるのか、についてはたずねていない。感情によって結ばれた狭く深い対人関係を形成しよう

とする低モニターは、真の親しい友人ができるまでには多少時間を要した<sup>24)</sup> ために入学当初の親しい友人と現在の親しい友人が異なっているのかもしれないし、高モニターは目的によって結ばれた広く浅い対人関係を結ぶがゆえに、調査時点の目的によって親しい友人が異なったのかもしれない。このように、親しい友人の変化がセルフ・モニタリング高低群で差はなくても、その理由は異なるものかもしれない、この点は今後の検討課題である。

友人選択理由において、高モニターは低モニターに比べて「相手の性格」「内面的類似」「サポート源」の理由が有意に高かった。「相手の性格」や「内面的類似」はセルフ・モニタリングの傾性にかかわらず友人選択において重視される側面であるが、特に高モニターは相手の内面性を重視して友人選択を行っていることが明らかとなった。これは、セルフ・モニタリングの下位概念である「他者表出行動への敏感さ」に起因するものと考えられる。他者の気持ちや考えを敏感に察知するがゆえに、内的側面で相手と合っているか、うまくやっていけるかに重点が置かれやすいのかもしれない。実際に、対象者の「他者表出行動への敏感さ」は高い数値を示している。「サポート源」は、自分に不足した部分をサポートしてくれる対象としての友人選択であり、まさに目的があつての友人選択理由と言える。これは目的に合った友人選択を行う<sup>7)</sup> という高モニターの特徴を示した結果といえよう。

友人とのつきあい方は、高モニターが低モニターに比べ「気づかい」のある関係を取り、また「関係志向」的で良好な関係を保とうとすることが明らかとなった。相手の気持ちを気づかい、グループの雰囲気を感じ、常にモニタリングしながら接している様子がうかがえた。これは、まさに高モニターならではの友人関係スタイルを示した結果といえる。

他方、低モニターは高モニターに比べ「関係不安」が高く、友人たちから取り残されるのではない、グループからどのようにみられているのか、といった不安を感じやすいことが明らかとなった。また低モニターは高モニターに比べ「関係回避」

的で、あまり深くかかわらないように、距離をおいた関係を取りやすいことが示唆された。これは、低モニターの情緒的につながる関係を大事にするという、これまで言われてきた特徴に反する結果である。

現代学生にとって大学生活は、大学生活以外にも、アルバイトやサークル、中学・高校時代（地元）の友人、恋人など、様々な分割された世界の中の一つに過ぎないようである。このような分割された世界の中で、その場面や状況に合わせて自分を変化させていくことのできる高モニターは適応しやすいかもしれないが、大学内で低モニターが大事にするような感情によって深く結ばれるような関係を形成するのは困難な状況かもしれない。そのことにより大学内においては、低モニターはそもそも情緒的な絆で結ばれる友人関係を求めず、距離を置くような回避的な関係をとっている可能性がある。

情緒的な絆で結ばれるような友情は、時間もかかるし、そう簡単にそのような相手と巡り合えるわけでもない。しかしながら、大学での授業や行事に積極的に取り組み、同じ苦しみや辛さを味わい、協力し、支え合う経験の中で、確実に友情を深めている学生たちも少なくない。大学内での友情の芽生えは、直接的に大学への適応とつながっていくであろう。そのような友情による支えができるまでの間、大学側で他のかたちでサポートをし続ける必要があるのかもしれない。

## 5. 引用文献

- 1) Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- 2) 谷島弘仁 (2005). 大学生における大学への適応に関する検討, *人間科学研究*, **27**, 19-27.
- 3) 白石智子 (2005). 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究—認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察— *教育心理学研究*, **53**, 252-262.
- 4) 岡田努 (2007). 現代青年の心理学, 世界思

想社.

- 5) Snyder, M & DeBono, K. G. (1987). A functional approach to attitudes and persuasion. In M. P. Zanna, J. M. Olson, & C. P. Herman (Eds.), *Social influence*. Hillsdale, N. J. InL. Erlbaum.
- 6) Tomarelli, Michele M. & Graziano, William G. (1981). *When opposites may Attract: Self-monitoring and dating relationships*. Paper presented at the Annual Meeting of the Southeastern Psychological Association.
- 7) Snyder, M., & Gangestad, S. (1982). Choosing social situation: Two investigations of self-monitoring processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 123-135.
- 8) Snyder, M & DeBono, K.G. (1985). Appeals to images and claims about quality: Understanding the psychology of advertising. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 586-597.
- 9) Snyder, M. & Berscheid, E., & Glick, P. (1985). Focusing on the exterior and the interior: Two investigation of the initiation of personal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1427-1439.
- 10) Snyder, M. (1986). Public appearances, private realities: The psychology of Self-Monitoring. W. H. Freeman.  
(斉藤勇 (監訳) (1998). カメレオン人間の性格: セルフ・モニタリングの心理学 川島書店)
- 11) 小口孝司・安藤清志・長縄久生 (1998). 対人サービス業従事者のパーソナリティ 産業・組織心理学研究, **12**, 39-48.
- 12) 八城薫・小口孝司 (2001). 恋人・夫婦間におけるセルフ・モニタリングの類似性 日本心理学会第65回大会発表論文集, 879.
- 13) 八城薫・小口孝司 (2003a). セルフ・モニタリングの両義性について—他の心理学的個人差との関わりから 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **6**, 27-35.
- 14) 八城薫・小口孝司 (2003b). グリーン・ツーリズムへの参加を規定する社会心理学的要因 観光研究, **14**(2), 27-36.
- 15) 八城薫・小口孝司 (2003c). 観光地選好に及ぼす個人的原風景と心理学的個人差 観光研究, **15**(1), 27-33.
- 16) 八城薫・小口孝司 (2003d). ガソリン・スタンド従業員の販売成績に関わる個人差要因 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 386-387.
- 17) 八城薫 (2005). セルフ・モニタリング 2 要因モデルの検討と展開 第9章 接客サービス業従事者の心理と職業意識 昭和女子大学大学院生活機構研究科博士論文 (未公刊).
- 18) 八城薫・花井友美 (2005). 大学生の携帯電話利用のスタイル (2) —カメレオン人間は携帯電話がお好き? 日本心理学会第69回大会発表論文集, 264.
- 19) 花井友美・八城薫 (2005) 大学生の携帯電話利用のスタイル (1) —通話相手を選ぶ若者たち 日本心理学会第69回大会発表論文集, 263.
- 20) 古田雅明・八城薫 (2007). 対人援助職の養成に関する基礎的研究 —大学生・大学院生・臨床心理士の比較から— 大妻女子大学心理相談センター紀要, **4**, 31-39.
- 21) Snyder, M. Gangstad, S., & Simpson, J.A. (1983). Choosing friends as activity partner: The role of self-monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1061-1072.
- 22) Snyder, M., Simpson, J.A., & Smith, D. 1984 *Personality and friendship: The role of Self-Monitoring in choosing close and casual friends*. Paper presented at annual meetings of the Midwestern Psychological Association, Chicago.
- 23) 八城薫 (2008). セルフ・モニタリング傾向が携帯電話利用および生活充実感に及ぼす影響, 大妻女子大人間関係学研究, **9**, 187-197.
- 24) Snyder, M. & Smith, D. (1986). Personality and Friendship : the friendship worlds of self-monitoring. In V.J. Derlega, & B.A. Winstead (Eds.), *Friendship and Social interaction*. New York : Springer-Verlag.

- 25) 田中熊次郎 (1975). 新訂児童集団心理学  
明治図書.
- 26) 石黒鈺二 (1951). 友人関係の発達：生活場  
面によるその変動 児童心理, 5.
- 27) 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関す  
る考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 28) Lennox, R. & Wolfe, R.N. (1984). Revision of  
the self-monitoring scale. *Journal of Personality  
and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- 29) バスA. H. 大淵憲一 (監訳) (1991). 対人  
行動とパーソナリティ 北大路書房 (Buss,  
A. H. 1986 *Social behavior and personality*.  
Hillsdale, NJ: Lawrence Eelbaum Associates.)
- 30) 小口孝司 (1995). サービス業従事者のパー  
ソナリティ 日本労働研究機構調査研究報告  
書, **62**, 158-173.

### 【謝辞】

本研究にあたり、久留米菜乃さん、流石香織さん、柴田美菜代さん、田中美帆さん、福田沙織さん、三原由似さんにご協力いただきました。また調査実施にあたり、専修大学経営学部の佐藤暢先生にご協力賜りました。心から感謝申し上げます。